

私がこの1年この地に残った理由は分かる？

彼は、遠く九州のある街で育った。大学は国立大学教育学部に入學した。子どもが好きで、市が運営する孤児施設の夜の「学習指導ボランティアクラブ」に所属する先輩の紹介で、週2日、その施設の子どもの勉強の世話をしていた。彼は、このクラブ以外運動系と文学系の部活とサークルにも参加し、活発にやっていた。

彼は同クラブに参加して、同地の県立大学の一つ年上の女子大学生と知り合った。彼女もこの地から遠く、四国の地方出身だった。彼女も子どもが好きだったので、大学の掲示板にあった同クラブの募集広告に応募して、1年前から参加していた。

彼女とは彼の先輩の誘いで、このクラブの活動以外でも会うこともあった。彼女と子どもの教育についてよく議論した。学校教育での一斉授業の是非。授業はどうしてもある基準で授業をせざるを得ない。そうすると、それ以下の子ども達には授業が分からない。それ以上の子ども達には簡単すぎて授業がつまらなくなる。能力別クラス編成にすべきか。いや、そうすると偏見か差別感が生まれる。一人の教員でどれだけの人数の子ども達を見れるか。教師の技量か、子ども達の捉え方か。授業についてだけではなく、子ども達の学力以外の能力を育てる体験活動やピアジェの理論、アメリカのオープンスクールやチャータースクールにも議論が及んだ。子ども達のサバイバル活動を運営していた私も、時々その議論に加わることもあった。行きつけの喫茶店で、コーヒー1杯で何時間と議論した。

そんな中、彼は彼女に好意を寄せ始め、会う機会も増えていった。彼女も彼のそんな気持ちを受け止めていた。

彼は、子ども達の教育について机上の空論を嫌い、彼の描く理想の教育を求め、子ども達を集めて実践し始めた。

彼女は彼より先に大学4年生になり、就職か大学院進学かを決めなくてはならなくなった。しかし、彼が追い求めている事業に携わりたく、卒業後もこの地に残り、アルバイトで生計を保った。8月上旬、実家から電話があり、お見合いの話もあるから帰るように強く言われた。当時では普通の地方の話である。

クリスマスイブの日、彼は彼女から誘われ、初めて彼女のアパートに行った。クリスマスを祝いケーキを食べ、彼女の手作りの料理を頂いた。その時、彼女から実家でお見合いの話があることを聞かされた。「ねえ、私がこの1年この地に残った理由は分かる？」と問われ、彼は迷い、気持ちを打ち明けられなかった。事業を始めて1年程経つが、厳しい現実には事業が安定していなかったからだだったと言う。1週間後の大晦日、彼女はアパートを払い、実家に帰った。正月、彼が私の家に来て、彼らの別れを聞いた。